

5 栄家と交友群像

新橋の演舞場の右前に「旅館栄家」という小さな看板のかかった家がある。女将の名がお栄さんであるところから栄家と名付けたのであろうかと思っていたが、そうではなく前の持主の屋号であつたそうだ。お栄さんは六十の坂を若干越した姥桜で、どう見ても美人とはいえないが、なかなかの器量人で、度胸もあり人情もある苦勞人だ。

玄関の左側に六畳ほどの仏間があつて、仏壇には何れも故人となられた長崎英造氏と池田勇人氏の写真が掲げられてある。お栄さんは広島市の生れで、若い頃は有名な芸者であつたが、戦時中東京に出て、この地で旅館を経営することになった。彼女が広島から東京に出かけてくることになつたのは、長崎英造氏の薦めによるものであつたし、賀屋興宣氏や池田勇人氏さらには田中好一氏等には随分と世話になってきたようだ。そこで今に至るまで朝夕、香華を絶やすことなく、長崎、池田両氏の靈を祭っている。

長崎氏をはじめとして、栄家にはその後、広島ならびに広島出身の政財界の人々、さらにはその人達と何らかの繋がりをもった人々が主として出入するようになり、栄家はいつの間にか「広島人のクラブ」という実体をもつようになってきた。

賀屋興宣、池田勇人といった政界の大御所をはじめ、灘尾弘吉、三好重夫、宮沢喜一といった人々も、揃って広島出身であり、従ってこれらの人々に繋がる多くの政界人が、ここに出入するようになった。私も池田さんを通して、前尾繁三郎、黒金泰美両氏とともにしげく出入するようになったし、迫水久常、愛知揆一、山際正道らの各氏は、思うに賀屋、池田両氏を通して栄家との縁が出来たのであろう。

財界では永野重雄、桜田武、香川英史、高橋朝次郎、永井大三、石原武夫、石原周夫、太田利三郎、吉岡幸一、佐々木邦彦の各氏がそれぞれ広島出身であり、田中好一、松田恒次、藤田定市、白井市郎、橋本竜一等、広島財界の巨頭連も、上京のつどこの栄家を足場にされておるようだ。

栄家は由来内務省との縁が深かった。これは恐らく三好重夫、灘尾弘吉ら広島出身内務官僚のきもいりで、戦時中この家が内務省の宿舎になっておった機縁によるものであるが、古井喜実、林敬三、門叶宗雄、田中楯一、上村健太郎、丹羽喬四郎らの面々も、栄家とは深い繋りをもっておられる。

面白いもので、こうした人々が核になって、今日では相当広汎かつ厚な人的交流が、この小さい旅館を舞台に繰り拡げられておる。毎月八日には、「大平会」といって、私を中心にした会合がこれこれ十六年もの永きにわたって連綿と続いておる。会員は松本正雄、本田弘毅、小泉幸久、植松清、田中外次、宮崎一雄、田林政吉、高橋朝次郎、近藤淳、露口達の各氏である。池田さんは生前この会の顧問として終始出席されていたが、この会の人々が、毎月の第一水曜日の昼に、池田さんを中心に集ろうではないかということになり、一水会と名付けられた。その会には大平会のメンバーの他に、成吉競、川村音二郎の各氏も参加され、池田さんの歿後はその身代りとして前尾繁三郎氏が加わっておる。

この会で最も活発にかつ齒に衣を着せないでモノをいい、いつも話の中心となられるのは宮崎一雄さんで、終始しんみりと清談と芸能を楽しんでおられるのは小泉幸久、本田弘毅、田中外次等の各氏であろうか。突然、絶妙な警句で一同を驚かせるのは近藤淳氏、緑酒を最も楽しめるのは高橋朝次郎氏といえよう。この会では時おり芸能家を呼ぶことにしておる。落語家の円香さんが生前よく来て下さったが、近頃では柳橋さんがよく勤めて下さる。柳橋さんは本郷の名門誠之小学校の出身で、洒脱な落語の他、小学時代の数々の思い出も伺ったものである。踊りの故藤間寿右衛門、藤間秀斎、藤間文章、竹原はん、市川翠穂さん等も、たまには来てくれる。

中旬になると十二日会といって、池田さんを中心として、大蔵省のOBと現役幹部との親睦を目的とする会がもたれる。これは小泉幸久さんのきも入りで十年ほど前に始められ、池田さん逝去の後においても依然、盛大にやっております。

毎月第三の火曜日には火曜会といって、松永安左工門、菅礼之助という古老をはじめ、宇佐美洵、木川田一隆、芦原義重、井上五郎、横山通夫、小林中、永野重雄、桜田武、今里広記、水野成夫、奥村綱雄、太田利三郎、山際正道らの各氏に、政界からは賀屋興宣、前尾繁三郎そして私が参加している。松永老は定刻一時間ほど前に来られ、いいたいことをいってしまうとサッサと引揚げられる。九十二歳というのに依然、壯者を凌ぐ元気を発散されているのはうれしいことだ。菅老は静かな深い湖水を見るような人で、多くを語られないが、一同の敬慕の的となっておられる。もともとこの火曜会というのは、池田さんが大蔵大臣時代に、故長崎英造氏のきも入りでできた池田会の後身である。

同じく中旬には賀屋会がもたれる。賀屋興宣氏を中心に大蔵省と通産省のOB（伊原隆、森永貞一郎、石田正、石原周夫、原純夫、石野信一、木村秀弘、石原武夫、上野幸七、徳永久次、松尾金蔵、佐橋滋の諸氏に迫水久常、愛知揆一の両氏と私）が参加してある。政治、経済、外交、社会各方面の問題が多彩に取上げられ論議される。一番大きい声を出すのは例によって石原周夫

氏で、ネッチリとうるさいのが上野幸七氏と石田正氏であろうか。速記録をとれば一番発言の分量が多いと思われるのは、何といても御大の賀屋氏である。この会には時おりゲストを招くことになっておる。田中角栄、椎名悦三郎、三木武夫、福田赳夫の各氏が、これまでにそれぞれゲストになった。終始しゃべり通しであつたのが田中角栄君、ほとんどおしゃべりをしなかつたのが椎名さんで、面白い対照である。

栄家での料理は、昼の会を除いてはもちろん日本料理であるが、すしで有名な久兵衛さんとてんぶらの花村さんがよく出張してくれる。久兵衛さんは秋田の出身で、小僧の時からその道に打込まれた名人で、一面大変な酒豪でもある。仕事のあいまあいまに日本酒をコップになみなみと盛り、ちよつと斜に向き直つて、コップの側を左手で抑えてキューツと一息に飲み干す。その飲みつ振りは一つの芸術といつてよいであろう。その表情もまた涼しく美しい。それにひきかえ花村さんは、始終黙つておられる。柿の葉その他珍しいてんぶらの原料がよく出てくる。子供の時、サツマイモを揚げ物にして賞味した私は、今なおサツマイモのてんぶらが好きである。花村さんはそれを知つてか、いつも私の前の容器には他の人よりも多くサツマイモを盛つてくれる。

古井喜実、三好重夫の両氏は旧内務省の偉才であるが、同時に相許した道友でもある。私はこの両氏とよく席を同じゆうし、各界の人々を総ざらいて榭卸しされるのを聞くのを楽しみにして

おる。その着眼の奇抜、その批評の鋭利さと真直さに、あるいは感銘し、あるいは反発し、時の過ぐるのも忘れるほどである。こういう偉い人々が、必ずしも世に容れられるものではないようだ。「このうちの障子やふすまは限なく一万円札で張りめぐらしたいとかねがね思っており、選挙ごとに切売りするので、俺の屋敷が段々狭くなるようで心細い」といつて阿々大笑する古井さんである。たしかに、古井、三好両氏は、かけ合い万歳を商売にしても相当繁昌しそうに思われてならない。

この他、関西から故太田垣土郎さんをはじめ、井口竹次郎、前田保男、久田守の各氏もこの宿の定連で、私もこれらの方々と清交を恵まれているのを倅せに思っており。